

聖書箇所：ミカ書5章1～9節

説教題：群れを飼う方が来られる

### 1 戦争の恐れの中で

待降節の第三週目を迎えております。旧約聖書から信仰の大先輩たちがどのように救い主を待ち望んでいたのかを見ております。先週はイザヤを取り上げました。ミカも、イザヤと同じく紀元前740年頃に預言者として活動した人と考えられています。

その頃の国際情勢はかなり複雑なものでした。イスラエルは北王国と南王国とに二つに分かれています。当時大きな勢力を誇っていたアッシリヤは、そんな北王国を狙い撃ちし、首都であったサマリヤを包囲します。サマリヤは3年間持ちこたえるのですが、紀元前722年に陥落してしまいます。当然次に狙われるのは南王国です。

そのような時代背景を頭に入れ、5章1節を読みます。「とりでが私たちに対して設けられ、彼らは、イスラエルのさばき司の頬を杖で打つ。」とりでを築いているのはアッシリヤです。彼らはやがて南王国にも攻め込み、南王国の指導者を捕虜にしまうとミカは告げているのです。南王国の人々は北王国がどのようにしてアッシリヤに滅ぼされていったのか、目の当たりにしました。当時の人たちの心理状態を想像してみましょう。

例えば、健康診断をしたら「精密検査が必要です。すぐに大きな病院に行ってください」と言われたとしましょう。まず何を考えるか。「何かの間違いだ。重大な病気にかかるはずがない。」こんなふうに、楽観的に考えたがるのではないのでしょうか。大きな地震

は起こらない。津波は来ない。原発は絶対に事故を超さない。日本では、震災が起きるまで、多くの方はそう思い込んでいました。

南王国の人たちも同じでした。目の前にアッシリヤの軍隊が向かってきたとしても、戦争は起きない。自分たちは北王国のようにはならない。そんなふうに考えようとしてきました。しかしミカはそんな楽観的希望的観測を打ち壊します。「とりでが私たちに対して設けられ、彼らは、イスラエルのさばき司の頬を杖で打つ。」

現実から目をそらしてはならない。幻想に逃げ込むのではなく、目の前にある現実に向き合うことを求めました。

### 2 キリストが来られる

ミカが本当に語りたかったことは、ここからです。2節。「バツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいのだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである。」

人々がこのことばをどう理解したのでしょうか。そのことは、マタイ2章4節以降を読むとわかります。イエスが誕生したとき、当時イスラエルの王であったのがヘロデが、「ユダヤ人の王が生まれた」とのうわさを聞いたときのことです。「そこで、王は、民の祭司長たち、学者たちをみな集めて、キリストはどこで生まれるのかと問いただした。彼

らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれているからです。」そして学者たちはこのミカ書のことばを引用していきます。

こうして見ると、人々はミカのことばがやがて来られる救い主のことだと理解したことがわかります。事実、そのとおりになりました。

### 3 群れを飼う方が来られる

では、ミカはやがて来られる救い主をどのように説明したか。次にその事を見ますが、今日は4節に注目します。「彼は立って、主の力と、彼の神、主の御名の威光によって群れを飼い、彼らは安らかに住まう。今や、彼の威力が地の果てまで及ぶからだ。」

「彼」とは救い主を指し、「彼ら」とはイスラエルの人々を指します。救い主は群れを飼い、イスラエルの人々はその救い主のもとで安からに住まう。ひとことで言えばそのような内容です。

かつて私が若かったとき、だれにも邪魔されずに自分の好きなように生きてみたいと思ったことがあります。そんなときに、あなたは羊であり、あなたは羊飼いのもとで飼われなければならない存在だと聞かされたなら、おそらくまったく受け入れられなかったでしょう。囲いの中に入れて羊飼いの命令に従わなければならない。自由が奪われてしまう。そう感じてしまうからです。信仰をもっていない方々も、キリスト教を信じることは何か不自由になるのではないか。そんな不安を漠然と感じていると思います。

私は、だれにも束縛されず、自由であることがしあわせだと信じていた頃、自分の力で自分の道を切り開いていくのだとがんばっ

ていました。確かにがんばればそれなりの報いもありました。しかし、同時に挫折も味わいました。失敗を繰り返すうちに、どうすることもできない壁があることがわかってきました。また、良い人間でありたいと思っ

ていながら、実際には人に言えないような、聖書で言う罪を繰り返していました。頭の片隅では、そんなことをしていたらどうなるのか、不安を感じているけれど、でもやめられません。自分で自分をコントロールできないのです。「だれにも束縛されたくない。自分の好きなように生きるのだ」と言いながら、一方ではどうすることもできない重苦しいものに捕らえられ、苦しんでいました。

後になって、その正体が聖書でいう罪ということなのだと教えられたとき、衝撃を受けました。と同時に、こう言ったらおかしいかもしれませんが、自分が何で苦しんでいたのかを知ることができ、肩の荷が下りたような気がしました。人間は罪を犯して神のもとから迷い出てしまった羊ですと聖書から教えられたとき、そのとおりと納得しました。イエスがたとえ話の中で語った放蕩息子のように、さんざんやりたい放題のことをして、その結果みじめな失敗をし、自分の弱さを認めるとき、初めて自分はひとりで生きることなどできないと悟りました。私たちのために羊飼いである方が来てくださることがいかに恵みであるかがわかるようになりました。

### 4 平和が来る

ミカは、南王国がアッシリヤによって滅んでいくことをはっきりと語り、人々が信じ込もうとしていたむなし安全神話をたたき壊しました。5節でも、「アッシリヤが私たちの国に来て、私たちの宮殿を踏みじる」

と語ります。

そう語りながらも、同時にミカは、羊の群れを飼う方が来られて、やがてその方が平和をもたらしてくださるとも語ります。それはいつなのか。その方が来られるまで、どれくらい待つことになるのか。3節にあります。

「それゆえ、産婦が子を産むときまで、彼らはそのままにしておかれる。」4章10節を読むと、もつとはっきりわかります。「シオンの娘よ。子を産む女のように、身もだえし、もがき回れ。今、あなたは町を出て、野に宿り、バビロンまで行く。そこであなたは救われる。そこで主はあなたの敵の手から贖われる。」

ミカが語ったことは、当時の人から見ればすべて先のことです。まだ起きていないことをミカは語りました。では、そのとおりになったのか。ならなかったのか。結論から言えば、すべてミカが語ったとおりになりました。紀元前586年に南王国はアッシリヤに攻め込まれ、人々はバビロンという敵の町に連れて行かれる、いわゆるバビロン捕囚が起きました。そこからおよそ50年経って、自分たちの国に帰ることが許され、やっと平和を取り戻すことになります。

どうでしょう。遅すぎると思いませんか。どうして、神はもっと早く救わないのか。どうして、「身もだえし、もがき回れ」とさえ言うのでしょうか。神の御思いをすべて知ることはできません。それでも、二つのことを言えると思います。

一つ目。北王国も南王国も、苦しみに会っていったのには理由があったと言うことです。彼らは、神に選ばれた民でありながら、聖書の神に背き、ほかの神々を拝んでいきました。そのような不信仰へのさばきとして苦しみが与えられました。

さばきと聞くと恐ろしく思います。でも子どもが親の目の前で間違っただけをしたら皆さんどうしますか。子どもの頭をたたいてでも、何か間違いであるかを教えようとしませぬ。どうして頭をたたくのか。子どもを愛するからですよ。子どもが正しい道を歩んでもらいたいと願うからなので、あえて厳しい態度をとる。神も同じです。私たちが愛するからこそ、間違っただけをしたときは、あえて厳しい態度をとります。つらい目にあつて初めて私たちは、どれだけ大きな罪を犯したか、身にしみて理解できるようになる。

私たちも、ときには苦しみに会うことがあります。神はなぜ祈りに答えてくださらないのかと疑問に思うときがあります。でも、神が苦しみを与えているのならば、必ず意味があるはずですよ。苦しみのなかに置かれて初めて、自分のことをふり返る。そこで何か大切なことに気がつかされていくことがあるように思います。詩篇119篇71節にあるとおりです。「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。」苦しみに聞くと、あつてはならないこと。災難のように感じます。しかし神が下さる苦しみにあつてはありませぬ。苦しみの中にも豊かな恵みがあると神は約束してくださいます。

二つ目。私たちが苦しんでいるとき、神は何をされているのでしょうか。ただ眺めているような方なのではない。反対です。神はみずから進んでもつとも汚れたところに身を置かれ、みずからも苦みを味わおうとされます。主は4節で、「主の力と、彼の神、主の御名の威光によって群れを飼ひ、彼らは安らかに住まう。」と言われました。このことを実現するために、神はどれだけの

ことをしてくださいましたか。私たちが苦しみに出会っていたとき、この方は何をしてくださっていましたか。この方も苦しんでいたのです。私たちが苦しみから救い出すために、十字架におつきになります。

イエスは言われました。「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」(ヨハネ 10 章 11 節)

旧約の時代、人々は救い主を待ち望みました。しかし救い主はなかなか来られません。遅れているようにさえ見えました。ダビデも叫びました。「主よ。いつまでですか。あなたは私を永久にお忘れになるのですか。いつまで御顔を私からお隠しになるのですか。」(詩篇 13 篇 1 節)

主はこの祈りを聞かれました。遅くなることはありません。私たちが叫ぶとき、主も同じく苦しみを共にされます。平和をもたらすためにこの方はいのちを捨てられます。

私たちの羊飼いになってくださる主の御名をあがめます。